

飛耳長目

通巻176号 平成30年7月1日発行

死生観特集号について

森信三

本号は「死生観」に関する特集号とした。これは実は予定の計画というわけではなくて突然の変更であり、しかもこのような突然の変更を敢えてした直接の動因は、本号所載の道友重谷佐加枝姉の「芦田先生の御臨終に侍りて」の好記録を恵まれたことによる。これは先生を最後の病床に看護して、その臨終を見とつた同志中の唯一人者の如実なる記録として、その意義まことに甚重だと思ふ。その上本記録の価値を重からしめるものは、記録者たる重谷姉が、多年禅の修業を通じてえられた悟得の心境を以て記されてあるが故に、そこには普通にともすればありがちな一切の形容的な修飾を払拭して、芦田先生という偉れた一人格の臨終の如実相を記録して頗る正刻である。これによって私はかねてひそかに西先生の臨終について疑問としていたものの氷解を得ると共に、人世の嵐を通過して辿り着いた現在の私の死生観及臨終観に対しても、如実なる実証を得て、その確信を強めた感がある。そこで序論代わに「死生観について」といふ拙文を附して「死生観特集号」としたわけである。今日のような時代に、死生観について云々することは、人によっては、時代のもつ激流的意義を解せざる者とされるでもあろう。しかし大事なことは、今日に於ては死生観その

ものに対して、一切の旧形骸を破碎して、一糸まとはざるその如実の相に於て再把握することが必要であり、而してかくの如きは、今日の時代が急湍激流の如くであればあるだけに、ますますその要あるを思うが故に、敢えて本特集を誌友諸兄に送るゆえんである。
（開頭）昭和27年6月号通巻59号巻頭）

死生観について

〜特に臨終観を中心として〜

森信三

私はこれまで自分と最も深い生命の交渉のあった西晋一郎先生、並に今回の芦田先生の御臨終によって、従来漠然と抱いてきた私の死生観が……突きつめれば臨終観ということになるかとも思うが……ある意味では大きな変化をとげたといつてよい。いつかそれを書いて誌友諸氏の御参考に供したいと思つていたが、たまたま今回重谷佐加枝姉から「芦田先生の御臨終に侍りて」という貴重な記録を頂いたもので、その全文を本誌に掲載すると共に、いわばその序論として、如上私の死生観の変化の概略を述べてみたいと思ふ。従つて誌友諸兄には一応まず繁谷姉の記録を一読せられてからこの小論を読まれるか、もしまたこの小論を先きに読まれるなら、次に繁谷姉のを読み返して頂

ネットで 森信三先生と修身教授録 と検索

きたいと思う。因に重谷姉は京都府船井郡高原小学校の教官で深く芦田先生に帰依されると共に、禅を故杉本中佐の師山崎益洲老師に就いて修められつゝある人。姉の学校から法樂寺へは自転車で山陰線へ出、それから汽車で福地山廻りで丹波竹田下車まで悠に二時間半はかゝる遠路を芦田先生が病床に就かれるや特に定期券を購入して、ほとんど毎日病床を訪ね、ついに臨終に待した同志中の唯一人であつて、先生の最後の病床に重谷姉のあつたことは、全く天この人を与えたりとの感が深い。

一

さて私の最初の自覚期は、しばしば記したように二十六、七歳の間であつて、その頃私は従来もつていた自分の相對觀を脱して一種の絶対觀に入り、當時としては一応自己の安立を得たことは確かである。そうした安立感を基板とし中軸として展開されたのが例の「修身教授録」である。しかし今にして思えば、当時の私の自覚は、未だ倫理的哲学的な色彩の強いものであつて、深く宗教的なものではなかつたといふことが、この頃になつて少しづつ分りかけて来たのである。今手許に「修身教授録」が揃つていないから、当時の私がどの程度に死生觀について述べているか確かでないが、勿論当時の私の自覚の底に一種の死生觀があつたことは

事実である。しかしそれは過ぐる一年半にわたる人生の嵐をたどつてきた現在の私から見れば、畢竟平面的把握に過ぎなかつたことが反省されるのである。即ちそれは死生觀の、いわば潜在含蓄の形における把握ではあつても、未だ現実ざりざりの処を潜つて得られたものではなかつたのである。

二

その後満州に渡つた私は、当時大陸ではたくさん見られたいわゆる大言壯語派の人から、ともすれば死生についての談義を聞かされる機会が多かつたが、当時の私は、内心「あゝした大言壯語者流は、いざという場合には案外醜い態度を示すに相違ない」と考へていた。だがそうした考へ方も、今日からみれば、私自身が身を以て突きつめて得た所信ではなく、普通に人々のいう処を、いわば無意味、無反省に踏襲していたに過ぎない。現在の私にはそうした所謂大言壯語者流と呼ばれる人々の中にも、文字通り従容と死にうる人の少くないであろうと思われるのである。

三

その後私にとつて死生の問題が、改めてやゝ身近かに問題となつたのは、西先生の御臨終に關してである。西先生の御逝去は昭和十八年十一月十三日であつて、当時新京にいた私は先生の臨終に侍し得

なかつたはもとより、御葬儀にすら列しえなかつたのである。しかし幸いなことに、その少し前まで私の処で家事の手伝いをしてくれていた三河の同志森武士民の長女みさをさんが国へ歸つていたので、西先生からの御依頼で、先生の処へお手伝いに上げており、先生の御臨終の様子を詳細に知らせてくれたのである。

さてその長文の手紙を読むことによつて私の心を強く打つた一事は、先生が死の直前まで御自身の死について何ら予感していられたなかつたらしいということである。当時の私には、あれほどの方でありながら、御自分の死を予感せられなかつたという事は、爾来私にとつて一つの大きな問題となつた。というのは、当時の私には、まだ従来の伝統的な死生觀の一面として「偉れた人は自らの死を予感されるだろう」という考へが漠然と乍らあつたからである。そのため正直に言つて私は、あれほどまでに尊敬していた西先生の御最期に對して、一派の割り切れない満たされなさを感じたのであつた。しかしその中にも戦局はいよく苛烈になつて行つたので、この問題もいつとはなしに私の心の領域から消えて行つた。（因みに前記みさをからの手紙もぜひ本号に載せたいと思つていたが何しろ長文……本誌四段……のもの故どうしても都合つかずやむなく来月号に公表することにした、乞諒承。）

四

その次に私が死生の問題に直面したのは、例の終戦後の奉天での流浪中、零下20度の空屋に寝て凍餓死を覚悟した時のことである。だが不思議なことに、それはあれほど深刻な経験であったにも拘らず、私の死生観の上にほとんど何物をも加えたという感がしない。況んや根本的な変革をやである。これは実に不思議なことである。だがそれはかの幸徳秋水が、死刑宣告の三日後の明治四十四年一月廿七日、小泉三申民宛の書翰中「死というものは高山の雲のようなもので、遠方か眺めると大した怪物のようにも見えないけれど、近づいて見ると何んでもないものだ。唯物論者には左右に振っていた柱時計の振子が停止した以上の意義はない：「と、いつているのと、立場こそ違え死に直面した者に共通の心理かも知れぬが、当時、

(1) 帰国後の希望が全然なかったこと及
(2) 在満同胞のすべてが、いつ帰国できるか全然見当のつかない上に、すべてが死の危険に曝されていた、という二つの原因によるとも言えよう。即ち人間は、この世における希望が全然なくなった場合、及び死が自分一人だけでなく、周囲のすべての人々の上にも同様にその危険が迫っている場合には、死の深刻さが、余ほどやわらぐものらしいのである。

五

ところが人生の嵐を通過することによって、私の死生観は、最近これまでとは大いに変わって来て、ある意味では根本的に変わったといってもよい。同時にそれは従来普通に「死生観」として言い交わし言い伝えられてきたものとは、多分にその趣を異にするものとなってきた。もつとも考えようによれば、古人の真に掴んでいたもの、正味は、その表現様式こそ一見正逆の如くに見えつつ、案外現在私の辿りついたものと相似のものであるかも知れない。しかしかかる論議は現在の私にとつてはそれほど重要ではない。

それよりも問題は、私がこれまで考えてきた自分の死生観が、形式的平面的なものに過ぎず、従ってそれは深刻な人生の嵐によつて木っ葉みじんに吹飛んで了ったということ、同時に現在私の辿りついたものも、実は死生観などと言いつついたものではなくて、只これ迄の形式的死生観の粉碎せられた荒野の大地さながらの無死生観であるという人もある。否普通に死生観を云々する人々の多くは、そうとしか考えられないであろう。しかし現在の私は、不十分なながらも一応自己の在りのままを率直にいう外ないという処までは辛うじて辿り着けたかと思

六

本号は、重谷姉の記録をまとめて載せるために、私の紙面はもう余り無いので、

以下現在私の辿りついた死生観の概要を、端的に箇条書きに述べてみることにする。
(1) 現在の私は、人間の偉らさをその人の死に様、即ち臨終の模様によつて決めるという思想からは完全に解放された。即ちその人の死がいわゆる「覚悟の大往生」だなどというものでなくとも、それは何らその人の偉らさを傷けるものではなく、否いわゆる「覚悟の大往生」などという言葉は、多くは後に残った門弟や親近者などが形式的な伝統によつて附した形容の詞である場合が少なくないといつてよからう。

(2) 従つていわゆる辞世などというものも、臨終下の氣息奄々たる境ではないのが当然で……予め予告のある切腹刑死などの場合は別であるが……普通に病気で亡くなる人の場合には、辞世はおろか、最後の遺言さえ得られない場合が多かるう。

西先生、芦田生共にそうだったようである。これはそうした場合人情として「何か遺言は……」とはなかなか言えぬものだからである。ゲーテはその臨終の語として「もつと光を！」と言ったと伝えられ、それを人生をより明るくしたいとの彼の全信念の表白などとする解釈もあるが、現在の私は最早そうした見解には無縁の徒である。ゲーテの真意はやはり未明の室のカーテンを明けて「もう少し明るく」してほしかつたのであろう。

(3) 従つて卓れた人は、自ら自己の死期

を予見して死の覚悟をする……などということは期待して考えるべきことではあるまい。でないといふ先生も芦田先生も、この点では、まづ落第といつてよいわけだが、今日の私にはそれは少しも両先生を傷けるものとは思はれない。一般には己が仕事を為し了えた人は、比較的死を予感し易く、これに反してまだ自分の仕事があると考えている人は、概して死を予感し難いかと思うが、それすら決して、一概に言えることではあるまい。

(4) 随て改めていう迄もないことながら、「死生観を得ている自分は、必ずや大往生を遂げるに違いない」と自負して、「おしの最期を見ていてみたい」などというが如きは勿論「少くとも自分は取り乱した死に様だけはしない」などと余断することさえ、われわれ人間には許されないことだと思われるのである。つまりお互い生き物である以上、何時何処で如何なる死に様をするか一切保証はしかねるといふのが、現在の私の偽らない心境なのである。

(5) かくしてこれ迄の卓れた人々の死について、多くの場合、後に残った人々によつて、大なり小なり美化され修飾された附加物が多く、そうすることによつて、その人の偉らさが完備するかに考えられてきた嫌いがあるが、それらは実はその人々自身が未だ人生の真底に徹していな

い証左である。その点別掲重谷姉の記録は、近來の偉れた一人格たる芦田先生の臨終の様を伝えて寸毫の虚飾なき点、真に得がたい文献であると共に、記録者その人の悟得底を窺い得て清爽の感がする。

七

現在私の辿りついている死生観の概要は、大体以上に尽きると言つてよい。要するに人はその死生観さえ確立していれば、如何なる場合にも「覚悟の大往生」が遂げられるかに考えられた従來の死生観には、どこかに尚形式的なものが附随しており、そこには自他共に気づかない或る自慰的なものが介入している場合が少なくないと思われるのである。死の真相は最端的には直接自分が死ぬことによつてのみ初めて知りうる事柄であり、随つて死以前にいかん死生観などと言つて思索論究してみても、そこには多かれ少かれ観念的想定との混入が避け難いわけである。勿論そうした死生観の究明を決して無用とする意志は毛頭ないが、しかし根本に横わるこの観念的想定性を看過しては未だしという外あるまい。

念のため最後に現在の私の死生観を要約すれば次の如くなるでもあろうか。人間生れて来た以上、いつかは必ず死なねばならぬ。しかし死んで何処へゆくかは厳密には何人にも分らうはずはない。強いて言えば生まれる以前の世界へ還る

までのこと。それも何時何処でどんな醜い死に様で命終となるやら凡夫のわれらには一切保証はつきかねる。その程度にわれら故、臨終に辞世などという立派なまねのできないのは勿論、恐らくは遺書さえ得言わぬ方が多かるう。ただこれだけのことである。しかもこれほど率直真摯にむき出しに投げ出しても、尚御意に召さぬとあれば……私如き者には親鸞のように「只面々の御計らいなり」と突き離す資格はもとよりないが、結局はこれ迄のご縁という外はあるまい。誌友諸兄、希くば深省三思、この平凡々たる大日常底に身を以て承当せられむことを。

(「開頭」昭和27年6月号通巻第59号)

あとがきに替えて

「開頭」全60号のうち59号に辿りついた。森信三先生の貴重な「死生観」に関する表白である。かかるものを誰しも他人には進んで語るお人は少ないかと思うが、森信三先生は違ふ。ご自分のお考えを何事にもコメントを附されるのである。次に森信三先生が推される重谷姉の記事を掲載する。(30日二纂)

〒633-0003
桜井市朝倉台東2-538-189
電話 0744-4513422 臂 繁二
Email: hji3@ken.jp
http://web1.ken.jp/syushn